

「観天望気」

【第24回】観天望気

季節は春、色々な草木が花を咲かせる時節です。皆様の中にも、陽気の中、散歩したり花見をしたり、外出を楽しんでおられる方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

日本には四季があり、折々の自然の恵みを、観て、感じる習慣を持っている人が沢山います。桜や藤などの花見や秋の紅葉狩りなどはその代表例であり、行楽のため多くの人が出かけます。自然を観る習慣は、現代だけのことではなく、昔の人も同じだったようです。代表的な古典である新古今和歌集では、第一巻から第六巻は、春夏秋冬のそれぞれの季節に詠まれた和歌が編纂されており、目次が「春歌、夏歌・・・」となっていることを見ても分かります。春の歌を一つ紹介しましょう。

春雨はいたくな降りそ桜花まだ見ぬ人に散らまくも惜し

桜の花をまだ見ない人にとって散ってしまうのは惜しいから春雨はそんなに降らないで欲しいという気持ちを歌ったものです。その時代の人が自然現象に目をやりながら心を動かしていたのが分かります。この歌のほか、春の和歌には、風、霞、雨、雪、雲、花といった自然を表現する言葉が頻繁にでてきます。

気象人である小官は、今も昔も人の観てきた自然とそれを感じる心は変わってないと感じながら、詠まれた時代の気圧配置や雨の降り方、風の強さなどを想像してしまいます。春の気圧配置は、移動性高気圧と気圧の谷が交互に日本付近を通過する周期変化や菜種梅雨と呼ばれ前線が東日本から西日本付近に停滞するのが代表的な配置です。気圧の谷の通過がある際は雨のほか、低気圧が発達した場合は風雨（温度によっては雪）が強まります。停滞前線は、長雨や霞をもたらす前線の位置によっては東風が吹き肌寒くなります。和歌が詠まれた時代にももちろん天気図はなく気圧配置は知る由もありませんが、和歌から想像する自然の姿から今と同様だったのだろうと思いを馳せます。

さて、私たち気象部隊の仕事場には「観天望気」という額が掲示してあります。空や大気の状態を観察し、過去の経験的な知識から天候を予測することを意味する言葉です。古い時代から現在にかけて、長い年月を自然とともに生きてきた日本人が各地で語り継いできた天気俚諺（てんきりげん）は観天望気の術となるものでしょう。数値予報が天気予報の決め手になっている昨今、なぜこの言葉を大切にしているのか。数値予報の精度は日進月歩で向上し、雨が降るか、寒くなるか、風がどれくらい吹くかなど全般的な予報はほぼ的中するようになりましたが、狭い範囲、数十分から1、2時間先の予報は、まだまだ人による観天望気が役に立つことがあるのです。筆者自身も「あの山が雪で見えなくなると飛行場にも雪雲が来る」「東風がにわかひんやりして海の匂いがすると海霧が入る」など観天望気により予報したことが実際にあります。数値予報データを最大限に活用しながらも、屋外に出て空を観て空気を感ずる観天望気を忘れてはならないとの先達からの教えがそこにあるのです。

今回、気象の杜を担当した小官、気象一筋30余年、長く空を見上げながら仕事をしてまいりました。我が航空気象群が「人」と「技術」の力を融合させ、崇高な任務を完遂することを切に願うばかりです。

観天望気